

王暉『今世説』について

小塚 由博

はじめに

1. 王暉と『今世説』
 2. 世説體作品について
 3. 『今世説』の特徴
 4. 『今世説』の登場人物
- おわりに

はじめに

王暉（一六三六—？）は、清初の杭州において活躍した文人である。彼は杭州を中心として廣範圍に渡る多數の文人たちと交遊していた。その王暉が編纂した『今世説』は、劉宋・劉義慶が編纂した志人小説集『世説新語』の體裁に倣

い、王暉とほぼ同時代の文人たちのエピソードを集めた作品である。その中には、實際に王暉と交遊關係のあつた人物も多く含まれており、王暉の交遊録とも見ることが出来る。一方で、魯迅等が指摘している通り、『世説新語』を模した作品は歴代數多く制作されたが、後世總じて評價が低い傾向が見られ、この『今世説』についても同様である。明代、とりわけ明末清初にも世説を模した作品が數多く編纂されているが、果たして『今世説』とはどのような特徴を有する作品なのか、本論ではその一端を調査考察してみたい。

1. 王暉と『今世説』

a. 王暉

まずは王暉と『今世説』について簡単に説明しておく¹⁾。

王暉、字は丹麓、號は木菴・松溪子。自ら松溪主人と稱した。浙江仁和「杭州」の人。明の世に諸生となり、清の世に入つても仕官を志すが、康熙二（一六六三）年に大病を患い科擧を斷念した。以降は經・史・子・集數萬卷を縱觀して樂しみ、様々な作品を制作する傍ら、杭州近隣の文人たち、例えば徐士俊・吳儀一・三毛（毛奇齡・毛際可・毛大可）や西泠十子（吳百朋・孫治等）・黃宗羲等と交遊を重ねた。さらに杭州に限らず江南一帯でも廣く名を有しており、曹爾堪・尤侗・褚人穫・徐鉉・周啓雋・蔣景祁・惲格・莊同生・黃周星・紀映鐘・張潮・汪楫・施閏章・魏禧・周亮工・余懷・杜濬等と交遊している。また、宋肇・李天馥・王士禛・張英・愛新覺羅博爾都等といった高位高官や王族ともつながりがある。文人たちで杭州を訪れる者はみな王暉との會見を望んだという。康熙十七（一六七八）年、王暉の才能を知る京師の官僚たちは博學隱逸の士として召し出そうとしたが、結局彼の志を奪うことは出來ず斷念した。没年は不

明であるが、一七〇四、五年頃に友人張潮に寄せた書簡²があり、一七〇〇年半ばにはまだ存命していたと思われる。著作としては、本論で述べる『今世説』以外に、著作集『霞巖堂全集定本』（三十五卷）、『雜著十種』、『遂生集』³（未傳）がある。更に、文人たちが王暉に寄せた詩詞文章を集めた『蘭言集』（二十四卷）があり、ここからも彼の幅廣い交遊關係の一端を窺うことができる。加えて友人・知人たちの短編作品を集めた叢書『檀几叢書』の編者（張潮と共編）としても知られる。

b. 『今世説』

『今世説』の詳細については次節以降で考察することとして、ここでは簡単にまとめておきたい。

『今世説』全八卷。テキストとしては、康熙二十二年（一六八三）年序刊本¹があり、のち清・伍崇曜（一八一〇—一八六三）編『粵雅堂叢書』第七集に收められる。現在おおむねこの『粵雅堂叢書』本が通行し、『四庫全書存目叢書』⁵所收本はこの影印である。また、活字本として『舊小説』己集、『叢書集成初編』等にも掲載されている。一方、日本には天明三（一七八三）年に袖珍本が日本に渡り、和刻本として享和三（一八〇三）年、尾張の儒者秦鼎（一七六一—一八三一）の手による「今世説序」が附された覆刻本²が刊行されている³。

その内容は、劉義慶『世説新語』の體裁に倣い、明末から清初にかけての文人たちのエピソードを集め、それを内容別に分類したものとなっている。全三十篇で、その篇名及び順番も基本的に『世説新語』のそれに従っているが、そのうち六篇を缺く。エピソードの總数は439條、登場する人物は王暉自身を含めておよそ396名にのぼる。一つのエピソードには一人或いはそれ以上の人物が登場し、人物についてはおおむね注がつき、名・出身・官職名、人となり等が記されている。

『今世説』冒頭には、王暉の自序と、友人の毛際可・嚴允肇・馮景・徐嗜鳳・丁澎の計五名の序文、更に洪圖光・林雲銘・顧豹文・薛依南・張綱孫・葉闡・毛先舒・吳農祥・黃百家・丁濬・鄭郊・周禹舌・王溶の計十三名による「評林」、また「今世説例言」が附されている。

2. 世説體作品について

前述の通り、『今世説』は『世説新語』の體裁を模して編纂された作品であるが、このような作品はこれまで數多く制作されている。本節では、世説體の代表作品について簡單に見ておきたい。

a. 「世説新語」と明末清初

『世説新語』については、多くの説明は不要であると思うが、ここでは『世説新語』の後世への影響について、とりわけ王暉が活躍した明末清初を中心に簡單に述べておきたい。

『世説新語』は南朝宋の劉義慶により編纂された志人小説集で、漢代から南朝宋に至る士人たちの逸話を集め、全三十六篇、エピソード別に分類したものである。そのエピソード數は1100條以上のものほり、その登場人物は劉孝標の注も含めて1500名以上にも及ぶ。その生き生きとした描寫は、後世の文人たちに高い評價を得、長い間大いに讀まれ續けた。とりわけ宋代に『世説新語』が刊行されると、より多くの人々に讀まれるようになり、以降その人氣はますます高まった。

その一方で、唐代以降、世説の體裁を模した續編、所謂世説體作品が次々と刊行された。具體的な作品については後

述するが、その内容は、『世説新語』と同時代およびそれに続く時代、あるいはその作者にとって過去の時代となる歴史的な人物のエピソードを集めたものや、その作品の作者が生きていた時代の人物のエピソードを集めたもの、さらに児童や女性別というようなテーマを設定し、そのエピソードを集めたものなどが見られる。なお、『世説新語』の後世への影響については、劉強氏の專著⁹⁾があり、時代別に分けて詳細な調査・分析が行われている。

では、王暉が生きていた明末清初はどうだったのか、それについては蔡麗玲氏の論考に詳しいが、明代は改めて『世説新語』が文人たちに注目され、注釋書やその體裁を模した作品が多數出版された。蔡氏はその流行の理由を、明代文人の六朝人士に對する憧憬が特別強かった、と指摘する。とりわけ王世貞（一五二六—一五九〇）が編纂したとされる『世説新語補』二十卷は、『世説新語』と明・何良俊『何氏語林』を合わせて編集し刊行したもので、李卓吾（一五二七—一六〇二）や鍾惺（一五七四—一六二四）の批評が附されて刊行され、好評を博し、『世説新語』人氣に拍車を掛けた。このような中で後述のような様々な世説體作品が制作され、王暉の『今世説』も刊行されることとなったのである。

一方、明末から清初にかけては、世説體に限らず叢書の編纂が盛んになされており、とりわけ友人・知人を中心として個々人の作品を集めたものが多數出版されている。例えば、詩を集めた錢謙益『列朝詩集』、鄧漢魏『詩觀』、詞を集めた蔣景祁『瑤華集』、詩文を集めた冒襄『同人集』、尺牘を集めた周亮工『尺牘新鈔』（全三編）、吳儀一『尺牘新語』（全三編）、張潮『尺牘友聲』（全三集）、筆記小説を集めた張潮『虞初新志』、『檀几叢書』、『昭代叢書』、吳震方『說鈴』¹⁾等枚舉に暇が無い。王暉自身も、前述の通り友人・知人から寄せられた詩・文・尺牘を集めた『蘭言集』があり、この『今世説』の編纂もこれと無關係ではないだろう。

b. 世説體の歴代作品

魯迅（一八八一—一九三六）は『中國小説史略』において、『今世説』を含む歴代の『世説新語』の様々な模倣作品が制作されたと指摘する一方、これら作品群を總じて「しかしながら舊聞を編纂しても取り立てて優れたものはなく、時事を述べていても飾り立て過ぎている」⁽¹³⁾云々と評している。また『中國小説的歴史的變遷』でも、後世『世説新語』の模倣作品がさらに多くなり、劉孝標の『續世説』から清の王暉の『今世説』、現在の易宗夔『新世説』等に至るまで様々な作品があるが、『世説新語』の制作された晉朝と現代社會の狀況は異なるのに作品を模倣することは可笑しな話であると評する。⁽¹⁴⁾

『今世説』そのものに對する評價については後述するとして、それでは魯迅が指摘している『世説新語』の模倣作品、つまり世説體作品にはどのようなものがあるのでしょうか。以下、前掲の先行研究等も参考にしながら、代表的な作品とその特徴を簡単に挙げておこう。

唐代

『大唐新語』十三卷—劉肅撰。元和二（八〇七）年自序有り。唐・武徳より大暦年間に至るまでの人物のエピソードについて、『世説新語』の篇名とは異なる「匡贊」「規諫」「極諫」等30篇に分類している。『四庫全書總目提要』卷一四〇、子部小説家類一の記述によると、もともと『新語』という名であったものが、明代になって『唐世説』と改題されて刊行されるが、清代になり再び『大唐新語』と題され刊行されたという。

このほか、前掲劉強氏著書によると、張詢吉『五代新説』、王方慶『續世説新書』があるとす。⁽¹⁵⁾

宋代

『續世説』十二卷―北宋・孔平仲（一〇四四―一一一一）撰。基本的には『世説新語』の篇名を踏襲しているが、順番が異なり、「豪爽」篇が無い。また「直諫」「邪詔」「邪佞」の三篇が加えられ、計三十八篇となっている。南北朝より唐五代の人物のエピソードを収める。

『唐語林』八卷―北宋・王讜（大觀（一一一〇―一一一五）年間の人）撰。唐代の人物のエピソードを収める。卷四までは、『世説新語』の篇名に従って並べられているが、十八番目の「賢媛」で終わっている。「政事」を上・下に分けているので、全十九篇である。卷五以降は「補遺」として、『永樂大典』所收の『唐語林』に關する記述を各時代（高宗から代宗など）順に並べている。

『南北史續世説』十卷―南宋・李焘（？―一一七九）撰。現存テキストには萬曆己酉（一六〇九年）俞安期の序文あり。『世説新語』三十六篇の後、「博洽」「介潔」以下十一篇があり、合わせて四十七篇となっている。その名の通り、『南史』『北史』よりエピソードを集めている。卷頭に「續世説新語敘」という文章があり、そこには唐の人としている。

明代

『兒世説』一卷―趙瑜（弘治三（一四九〇）年の進士）撰。その名の通り、文人たちの子供時代のエピソードを集めたものとなっている。登場する人物は漢代から明代まで廣範圍に渡る。篇名には『世説新語』の「言語」「排調」「文學」等の名も見られるが、それ以外に「爵對」「疆記」「臆識」「言志」「將略」等があり、計十七篇に分かれている。

『何氏語林』三十卷―何良俊（一五〇六―一五七三）撰。辛亥（一五五一？）文徵明の序文あり。漢から五代に至る人物のエピソードを記す。『世説新語』三十六篇に「言志」「博識」の二篇を加えて三十八篇とする。¹⁷ 前述の通り、のち

王世貞により『世說新語』と合わせて取捨選擇した『世說新語補』二十卷が編纂された。

『焦氏類林』八卷—焦竑（一五四〇—一六二〇）撰。全五十九篇に分かれており、そのうち二十六篇は『世說新語』と同様、残り三十三篇は「編纂」「君臣」「長厚」「慎密」等、新たに附け加えられた篇名である。内容は古代から元代に至るまでの人物のエピソードを集めている。

『皇明世說新語』八卷。李紹文撰。萬曆三十八（一六一〇）年序あり。その構成は三十六篇で、『世說新語』と同じである。目録によると、1511事項とする。徐達・宋濂・劉基といった明初より、文徵明・袁宏道・陳繼儒等明代後期に及ぶ人物のエピソードを収める。

『南北朝新語』四卷—林茂桂（萬曆十四（一五八六）年の進士）撰。天啓元（一六一二）年の自序有り。『南史』と『北史』より南北朝時代の人物のエピソードを集めたもの。「雅量」「規箴」「賢媛」「巧藝」「沙修」等、『世說新語』の篇名以外に新しい篇名を加えた六十三篇に分かれる。

前掲蔡氏によると、その他明末清初（十七世紀）には、三十種類に及ぶ作品が制作され、とりわけ隆盛を極めたとする。¹⁸ 例えば、潘士藻『閤然堂類纂』、劉元卿『賢奕編』、孫能傳『益智編』、樊玉衡『智品』、徐象梅『瑯嬛史唾』、周應治『霞外塵談』、馮夢龍『智囊』、『智囊補』、曹臣『舌華錄』、張壙『廿一史識餘』、鄭仲夔『蘭畹居清言』、江東偉『芙蓉鏡寓言』、張岱『快園道古』、宮偉鏐『庭聞州世說』、吳肅公『明語林』、李清『女世說』等の作品が挙げられており、それらを内容別に分類している。しかし、蔡氏は何故か『今世說』には言及していない。一方、前掲劉氏は、『今世說』について第五章「清代的『世說學』」第七節「清代『世說體』倣作舉要」にて清代の『世說新語』に倣った作品の一つとして言及している。

清代

『明語林』十四卷—吳肅公（一六二九—一六九九）撰、吳拱嶽校閱。篇名は『世說新語』に従い、德行篇を上・下に分けて計三十七篇とし、それに『何氏語林』と同じく「言志」「博識」二篇を加えて合計三十九篇とする。

『女世說』一卷—李清（一六〇二—一六八三）撰。その名の通り、女性のエピソードに限定したものの。全三十一篇。その篇名は、雅量・企羨等の五篇以外は、『世說新語』と篇名が異なる。なお、嚴衡（一八二六？—一八五四？）にも同名の作品が見られ、これも『世說新語』を模した作品である。

『漢世說』十四卷—章撫功の撰。「德行」「言語」「政事」「文學」等、『世說新語』の篇名を中心とした全十四部門に分かれる。その名の通り、漢代の人物のエピソードを集めている。

このほか、前掲劉強氏著書によると、梁維樞『玉劍尊聞』、汪琬『說鈴』、鄒統魯・江有浴『明逸編（明世說補）』、徐士鑾『宋艷』の名を挙げているが、このうち清末の徐士鑾『宋艷』等を除き、清初に制作されたものが多い。王暉『今世說』も清初であり、それ以降はあまり作品が見られないことを考えると、王暉の『今世說』がその世說體作品隆盛の最も後期となる作品の一つであったとも考えられる。¹⁹⁾

民國

『新世說』八卷—易宗夔（一八七四—一九二五）撰。民國七（一九一八）年序。『世說新語』と同様に三十六篇で構成されており、清初から民國初までの人物のエピソードを記載する。

3. 『今世説』の特徴

a. 『今世説』の評価

本節では、『今世説』の特徴について見てみたいが、まずはこれまでの『今世説』に対する評価を簡単に見ておこう。當然のことながら、『今世説』「評林」中の文人たちの『今世説』に關する評価はおおむね高い。例えば、「言葉は身近でもその意圖は遠大で、まことに晉朝の賢人の風味を有している（言近旨遠、眞得晉賢風味）」（顧豹文）とか、「臨川（劉義慶）にひけをとらない（不減臨川）」（丁滌）の如くである。しかしながらその一方で後世の評価は決して高くない。例えば『四庫全書總目提要』では、「思うに、（この書は）聲氣を標榜する作品であり、なお明代詩社の名残である。自分自身の事柄を作品に掲載するのは、とりわけ『世説新語』の體例と乖離している」と評し、さらに文章の後半部分では、俱體的に作品の記述の内容に言及してその誤りや記述の不正確さを指摘し、「空談は容易いが、實を求めるのは本當に難しいことだ（信乎、空談易而徵實難也）」と評している。

また魯迅は前述のように『今世説』を含む世説體の作品について、總じてあまり高い評価をしていないが、それはあくまで『世説新語』の模倣作品の總合的な評価を行っているに過ぎず、個々の作品の價値について詳細な考察や指摘を行っているわけではないと思われる。

更に、前掲の劉氏は、『四庫全書總目提要』の記述をあげ、『今世説』について「その作品の意圖をうかがうと、忠孝節義や文章道德の類いの説教で充たされており、『世説新語』の簡約で奥深い情趣とはほど遠い。その作品に敘述されている事柄は、廣く採集しているとはいっても、また荒唐無稽な談論を免れない」と評している。²¹

一方、陳大康氏は、前述魯迅等の評価を受けつつも、清初の文壇の状況や當時の文人たちの實態およびその活動状況

等を窺う一資料として見るべき點があり、世説體作品の中で、獨自の特色と價值がある、と指摘している。⁽²²⁾

以上のように、『今世説』の評價は、あくまで『世説新語』の模倣作品という體裁に關する評價が中心であり、その内容に關する評價は、まだあまり詳細に行われていないのが現狀である。

b. 『今世説』の制作動機

次に、王暉の自序より『今世説』の編纂動機について見てみよう。

まず王暉は、これまで經・史書以外の書物が多い反面、後世に傳わらない書もあり、傳わったとしても日の目を見ない書物があると指摘する。その中で、劉義慶の『世説新語』は、千數百年が過ぎても變わらず愛讀されている、と述べる。

經・史以外で、著述家の數は何千になるか分からない。しかしながら、その作品は（後世に）傳わるものもあれば、傳わらないものもあるが、幸いに傳わったとしても、人がそれを見るものもあれば見ないものもある。ただ『世説新語』一書だけは、南宋（劉宋）の時代に編纂され、晉の時代の出來事に觸れ、さらに漢・魏にも及んでいる。（それから）千數百年が過ぎても、學士大夫の家でこれを愛翫しないことはなかった。臨川王（劉義慶）の敘述は、清遠で格調高く、その時代に生まれて、名流をたつとび、その言葉遣いには見るべき價值がある。今に至り、その作品を読み、その片言の言葉を味わえば、人を寡黙にして深く考えさせるが、ただ恨めしいのは實際にその場に居合わせ、ともに酒を酌み交わすことが出來ないことだ。もしも（東晉の名門である）王・謝・桓・劉を一室に集め、眞劍に面と向かつて教えを得ることができたならば、心が廣々としだらかな氣持ちになるに違いない。⁽²³⁾

次に、話は現在（清初）の事となり、朝廷が文學を獎勵して名賢が多數輩出し、その様子が嘗ての『世説新語』が誕生した六朝時代にひけを取らないことを述べ、一方でそれを記録するまさしく『世説新語』のような作品が缺けていることを指摘する。そこで、王暉は官僚から在野の人士にいたるまで、その記述を集めてこの『今世説』を制作した、とする。

今朝廷は文學を重んじて名賢が輩出し、名門の才華は、遠く江左（ここではかつての六朝時代の東晉を指すか）に勝っているが、その名言や立派な行いが、歴史書にすべて掲載されるわけではない。とりわけ臨川王（劉義慶）のようにこれらのエピソードを集めて著述にあらわすものがいなければ、天下後世、また誰がこの當時の風流を知り、さらに前人を超える者があるうか。私は無才の身ではあるが、これを志して數年の歳月が過ぎ、上は朝廷の高官から、下は在野の隱者に至るまで、およそ一言一行、採録すべきものが有れば、およそ集めてこれを分類し記録した。何度か稿を改めて、しばらくしてやっと完成した。⁽²³⁾

最後の部分は、『世説新語』との比較を意識した文言となっており、『世説新語』と比べて採集する範囲が狭く、その編纂期間が短いことを述べている。

（本編には）あるいは名賢の生平の大節はもとより多いとしても、どうしてただこの一端を借りて伝えるだけだろうか（他に伝えるべきものがある）。この一端が（『世説新語』に掲げる）ほほの三本の毛や畫龍點睛の故事（23）のように、精神を伝えるものがまさしくこの中（『今世説』）にあるか否かは分からない。私は後人がこの作品をご覧に

なった時に、今の者が臨川の書（『世説新語』）をみると同じように、心がゆったりし楽しい気分になるかは分らない。しかしながら、臨川は漢末から魏晉の百年の出来事を取って、網羅編集することで、一家言をなしている。一方、私は数十年中の見聞によって、これに頡頏させようとしているのである。世のこれをご覧になる者は、私の骨折りを笑うことなきよう。

康熙癸亥（二十二（一六八三）年）仲春、武林の王暉牆東草堂に題す。

以上のように、王暉がこの『今世説』を編集したのは、自身が生きた時代の人物たちのエピソードを集め保存して後世に残すことが最終的な目的であり、あくまでその一つの方便として、當時誰もが知っていた『世説新語』の體裁に倣ったのではないかと考えられる。

c. 「今世説」の例言からみる編集状況

次に、『今世説』の俱體的な編集の方針やその状況について見てみよう。王暉は『今世説』の内容や編集過程等について、「今世説例言」十四箇條に説明している。それぞれの内容を簡単にまとめると、以下の通りである（便宜的に丸數字で通し番號を附けた）。

①この作品で取り上げた人物は、本朝（清朝）の人物を基準としているが、（明代の人物で）本朝にいたって死んだ人物も採用した。

②『世説新語』においても人物の異稱が多いが、この作品においても、あざなで稱したり雅號で稱したりしており、

その最も著名なものを掲載した。⁽²⁸⁾

③ 篇目については、『世説新語』の原本に従ったが、「自新」「黜免」「儉嗇」「讒險」「紕漏」「仇隙」の諸編については、あえて配列しなかった。後の君子の補完を待ちたい。⁽²⁹⁾

④ 各項目については、刻本のそれぞれの内容について検討し、どのエピソードをどの篇に入れるべきかを論じた上で各篇に掲載した。⁽³⁰⁾

⑤ 採用したエピソードは、各刻本の中からもっとも風雅なものを選んで収録した。もしも刻本で見たことの無いものであれば、見聞したことがあるものだとしても、みだりに配列しなかった。⁽³¹⁾

⑥ 劉孝標が『世説新語』に注を附けた際、多くの例を引いて證據を擧げて論じ、取り上げた書は、數百種にも及ぶが、『今世説』の場合は完成してから日が浅いため、参照し得る書物が無く、登場人物の履歴は、探し求めるのは非常に困難である。注に掲載している爵里から生平の大略に至るまで、あえて繁雑になるのを恐れず、廣く採集した。もしも探しても見つからない時には、その部分を缺くこととし、後人の採集を待ちたい。⁽³²⁾

⑦ 清代になって學問が盛んになり、名賢が輩出し、名言や立派な行いも、擧げきれないほどあるが、この書はただ諸作品の中に見たものによってまとめているのに過ぎない。遠近の諸名家で、全集をお送り頂ければ、その中からエピソードを選び取り、『今世説補』一書を作りたいと思っている。すみやかに書簡でお送り頂きたい。⁽³³⁾

⑧ 資金が缺乏し、出版の費用はすべて支援者に頼らざるを得ず、もしも援助して頂ければ有り難い。⁽³⁴⁾

⑨ 汪琬の『説鈴』一書は、素晴らしい内容の作品で、吳江（の本屋？）で版本を見つけ、本を借りて數十條ほど記録した。⁽³⁵⁾

⑩ 陸圻は、以前『西陵新語』（未詳）を著したが、晩年彼は行方不明になってしまい、まだ全編がない。ご子息の

陸寅（字は冠周）が、手ずから稿本を授けて下さり、この集で採用したものは多い。⁽²⁶⁾

① 汪楫・林雲銘・毛際可・朱溶諸氏よりご好評をいただいた。⁽²⁷⁾

② 丁澎・張綱孫・毛先舒・陸進・諸匡鼎の諸氏は、それぞれ新作を提供していただいたので、有り難くお借りし、採用した。⁽²⁸⁾

③ 方象瑛（字は渭仁）より手紙が届き、休暇を得て歸郷したあかつきには、助力したいとのお言葉をいただいたが、今出版の期日が迫り、長くは待ってられない。⁽²⁹⁾

④ この書はもともと同人たちと互いに参照校訂しているが、先君（王暉の父王湛のこと）の記述二條については、どちらも同人たちが制作して採録したもので、そのまま原文通りに従っており、諱を避けていないのは私（王暉）が意圖したものではない。また、私に關する記述は、もとより記録するに値しないが、四方の諸先生からたくさんのお言葉を頂き、同人がそれを一つ二つ……と採用して、作品の中に掲載したのも、汗顔の至りである。⁽³⁰⁾

この中で特に注目すべきは、『今世説』に採用した各エピソードは、あくまで他の作品に掲載されているものであり、例えば汪琬の『説鈴』、陸圻『西陵新語』をはじめ、丁澎・張綱孫・毛先舒・陸進・諸匡鼎等の作品より提供をうけている、ということである。また、『今世説』の編纂は、その構成や費用等も含めて王暉と關係する同人たちが大きく關與していることも分かる。これは、④にも見られるように、本來採録すべきではない王暉自身や關係者の記述が掲載されることになったことから窺える。これらは『今世説』の編纂の根幹に係わることであるが、本論では紙數の都合上これ以上詳しく述べないこととし、具體的な考察は別の機会に行うこととしたい。

d. 『今世説』の體裁

『今世説』の篇名と卷數は以下の通りである。

卷一—德行	卷二—言語	政事	卷三—文學	方正	卷四—雅量	識鑒	賞譽
卷五—品藻	規箴	捷悟	夙惠	卷六—豪爽	容止	企羨	傷逝
卷七—棲逸	賢媛	術解	巧藝	寵禮	任誕		
卷八—簡傲	排調	輕詆	假譎	汰侈	忿狷	尤悔	惑溺

ところで、『今世説』は前述の通り『世説新語』の體裁に倣つて編纂されているが、下記の通り、『世説新語』36篇に對し、『今世説』は30篇で構成されている。『世説新語』の構成と比較すると、以下の通りとなる。

德行	言語	政事	文學	方正	雅量	識鑒	賞譽	品藻
規箴	捷悟	夙惠 ⁽¹⁾	豪爽	容止	〔自新〕	企羨	傷逝	棲逸
賢媛	術解	巧藝	寵禮	任誕	簡傲	排調	輕詆	假譎
〔黜免〕	〔儉嗇〕	汰侈	忿狷	〔讒險〕	尤悔	〔紕漏〕	惑溺	〔讎隙〕

各篇の順番は『世説新語』と同様であるが、「」で示した篇が缺けている。これは一體何故であろうか。

これについて王暉は前掲「例言」で「この作品の條目は、みな『世説（新語）』の原編にしたがっている。ただ「自新」「黜免」「儉嗇」「讒險」「紕漏」「仇隙」の諸編は、あえてみだりに並べなかつた。長所を引いて短所を覆うのは、理屈

として當然である。全編を補って作品を完成させることについては、後世の君子諸君を待ちたいと思う⁽¹⁵⁾と記しているのみで、その真意については不明であるが、恐らく採用すべきエピソードがなかった、と考えるのが妥當であろう。次に、それぞれの篇に掲載されている條目數を示しておこう⁽¹⁶⁾。

德行(40) 言語(30) 政事(17) 文學(48) 方正(11) 雅量(21) 識鑒(8) 賞譽(34) 品藻(23)
 規箴(5) 捷悟(5) 夙惠(13) 豪爽(26) 容止(17) [自新] 企羨(17) 傷逝(11) 棲逸(13)
 賢媛(6) 術解(6) 巧藝(12) 寵禮(3) 任誕(13) 簡傲(11) 排調(11) 輕詆(11) 假譎(3)
 [黜免] [儉嗇] 汰侈(1) 忿狷(5) [讒險] 尤悔(2) [紕漏] 惑溺(16) [讎隙]

計439條

以上から分かるように、掲載エピソードが多いのは「文學」(48)で、次に「德行」(40)、「賞譽」(34)、「言語」(30)……と続く。一方で少ないのは、「寵禮」(3)、「假譎」(3)、「尤悔」(2)などで、最も少ないのは「汰侈」(1)である。

参考までに、以下『世說新語』の各篇條目數も挙げておく⁽¹⁷⁾。

德行(47) 言語(108) 政事(26) 文學(104) 方正(66) 雅量(43) 識鑒(28) 賞譽(157) 品藻(88)
 規箴(27) 捷悟(7) 夙悟(7) 豪爽(13) 容止(39) 自新(2) 企羨(6) 傷逝(19) 棲逸(17)
 賢媛(32) 術解(11) 巧藝(14) 寵禮(6) 任誕(54) 簡傲(17) 排調(65) 輕詆(33) 假譎(14)

黜免(9) 儉嗇(9) 汰侈(12) 忿狷(8) 讒險(4) 尤悔(17) 紕漏(9) 惑溺(7) 讎隙(8)

計1133條

『今世説』掲載の個々のエピソードについて、記述の分量は様々である。例えば、試みに卷一全40條のエピソードの本文と注の文字数を示すと以下の通りである()内は本文の字數/注の字數。

- (45)
1 梁清標(68/36)、2 孫奇逢(54/57)、3 徐旭齡(43/33)、4 胡亶(67/40)、5 魏兆鳳(44/21)、6 嚴沆(42/73)、7 黃與堅(22/102)、8 方成郊(84/99)、9 黃雲・陳素(86/57)、10 田作澤・黃雲(75/87)、11 周亮工・趙璧・陳鴻(50/289)、12 毛奇齡(35/95)、13 計東(73/35)、14 王翹・嚴正矩(40/156)、15 荆文端(140/143)、16 毛之履(59/122)、17 王範(36/98)、18 田茂遇(75/59)、19 田茂遇妻(54/0)、20 蕭孟昉(40/22)、21 沈泓(64/12)、22 王湛(72/123)、23 包名捷(54/32)、24 毛應鎬(37/12)、25 姜鶴儕・顧夢遊(31/206)、26 陸圻(45/32)、27 趙希乾(58/31)、28 李士楷・李士模(118/15)、29 沈謙(57/80)、30 孫默(77/38)、31 唐容齋(78/121)、32 陳廷會(41/50)、33 姜廷梧・徐臧(46/142)、34 沈蘭先(47/9)、35 王暉(44/136)、36 孫宏・朱一是(51/173)、37 呂律(69/64)、38 袁駿(41/125)、39 包秉德(60/48)、40 閔世璋(75/121)

以上のうち、本文の文字数が最も多いのは15荆文端の140字、少ないのは7黃與堅の22字である。注の場合は、最も多いのは25姜鶴儕・顧夢遊の206字で、最も少ないのは34沈蘭先の9字である。(46) 本文と注のバランスも様々で、

例えば7黄興堅は本文は22字しか無いが、注は102字もある。また、11周亮工・趙璧・陳鵬は本文が50字、注が289字もある(そのうち、趙璧・陳鵬2名の注は合わせて12字で、残りは周亮工の注)。一方、15荆文端は、本文140字・注143字とほぼ同数であり、李士樞・李士模は本文118字、注は15字である。本文・注合わせて多いのは15荆文端の283字で、最も少ないのは24毛應鏞の49字である。以上のように、それぞれの記述には文字数から見てもかなり差があることが分かる。

4. 『今世説』の登場人物

a. 『今世説』中の中心人物

『今世説』に登場する人物は、文末附表の通り400名弱という多数にのぼる。これらの人物のエピソードが前述の通り各篇にテーマ別に分類されている。なお一つのエピソードに複数(2名〜7名)の人物が登場する場合も多数見られるので、必ずしも總エピソード数とは一致しない。

そのうち、登場回数が多い人物としては、以下の通りである()が登場数。

陸圻(23)、王暉(18)、周亮工(17)、毛先舒(15)、計東(10)、王士禛(9)、汪琬(9)、毛奇齡(8)、王士禛(7)、孫治(7)、張綱孫(7)、諸九鼎(6)、沈謙(6)、吳百朋(6)、曹爾堪(5)、陸繁昭(5)、宋琬(5)、施閏章(5)

この中で多いのは、「西冷十子」である。「西冷十子」とは杭州の文人たちで構成される西冷詩社の代表的メンバーで、西湖を中心に活動し、その作品は好評を博した。そのうちもっとも登場回数が多い陸圻（字は麗京。浙江錢塘の人。一六一四—？）は、その中心的人物であり、『今世説』における登場箇所は【徳1／言2／文1／方1／賞2／品5／捷1／企2／傷1／術1／任2／排2／輕1／惑1】と分散している。『今世説』の登場回数は最多であるが、一方で王暉との交遊の記録は『檀几叢書』に作品（初集卷二十七「新婦譜」）が掲載されている以外は、全く見られない。ただし、甥（二弟陸培（字は鯤庭。一六一八—一六四五）の子）の陸繁韶（字は拒石。浙江仁和の人。？—一七〇〇）【文1／品2／惑2】、陸圻の三弟陸堦（字は梯霞。【企1】）や四弟陸埜（字は左城。【捷1／排1】）とは交遊が見られる。なお、陸圻は康熙二（一六六三）年に莊廷鑑の史禍に連座して投獄され、後釋放されたが、その後失踪して行方不明になり、いつどこでこの世を去ったか不明である。このことも、王暉との交遊が見られない理由の一つかなのも知れない。前述の通り、『今世説』中には陸圻の著述から採用された話もあると思われるが、具體的にどれを指すかについては不明である。

同じく「西冷十子」の一人である孫治（字は宇臺。浙江仁和の人。一六一六—一六八二）【文1／賞1／品2／術2／輕1】、張綱孫（字は祖望。浙江仁和の人。【方1／賞2／品2／容1／輕1】）、沈謙（字は去矜。浙江石門の人。一六二〇—一六七〇）【徳1／賞1／容1／棲1／術1／巧1】、吳百朋（字は錦雯。浙江錢塘の人。【文2／賞2／豪1／容1】）と続く。その他、柴紹炳（字は虎臣。浙江錢塘の人。一六一六—一六七〇）【方1】、陳廷會（字は際叔。浙江錢塘の人。【徳1／品1／排1】）、丁澎（字は葯園。浙江仁和の人。一六二二—一六八六）【雅1／識1／賞1】、虞黃昊（字は景銘。浙江石門の人。【夙1】）、毛先舒（後述）や、張綱孫の弟張麒孫（字は祖靜。【輕1】）・張振孫（字は祖定。【輕1】）も登場する。

周亮工（字は櫟園。河南祥府の人。一六二二—一六七二【徳1／言1／政1／文2／雅1／識1／賞2／豪1／企3／巧1／簡1／輕1／惑1】）はとくに藏書家として知られている。王暉は彼と交遊があり、書簡の應酬や詩文のやりとりも複数見られる。なお、『今世説』にはその父の周文煒（字は赤之。一五八八—一六四三【識1】）や息子周在浚（字は雪客。【輕1】）の記述もあり、周在浚とは交遊も見られる。

古文家として著名な三毛のうち、毛先舒（字は稚黃。浙江仁和の人。一六二〇—一六八八【言1／識1／賞2／品5／豪1／容1／企1／巧1／輕1】西冷十子の一人でもある）および毛奇齡（字は大可。浙江蕭山の人。一六二三—一七一六【徳1／言1／文1／賞1／品1／豪1／巧1／排1】）も多数登場する。なお、三毛の残る一人である毛際可（字は會侯。浙江遂安の人。一六三三—一七〇八【言1／政1／賞1】）やその父毛之履（字は太素。【徳1】）についても、『今世説』に記述がある。三毛ともに王暉と交遊がある。

計東（字は甫草。江蘇吳江の人。一六二五—一六七六【徳1／言1／雅1／品1／捷1／豪1／企1／傷1／排1／輕1】）はその才能を明の史可法や清の王熙らに高く評價されたが、出世することは叶わなかった。同郷の顧有孝・吳兆騫・潘耒と並び稱された。そのうち顧有孝（字は茂倫。一六一九—一六八九【方1／賞1】）および吳兆騫（字は漢樞。一六三一—一六八四【文1／識1】）も『今世説』に登場する。

王漁洋の名で知られる王士禛（字は貽上。山東新城の人。一六三四—一七一〇【言1／政1／文1／賞1／規1／豪1／排1／輕1／惑1】）と、その兄王士禛（字は子底。一六二六—一六七三【言1／文1／品1／企1／簡1／尤1／惑1】）は、ともに詩人として著名であり、後述の海内八大家にも含まれる。意外にも兩名が同時に登場するのは、惑溺篇の記述1つのみである。王暉は兩名ともに交遊がある。

汪琬（字は茗文。江蘇長洲の人。一六二四—一六九一【言1／賞1／品1／規1／企2／簡1／排1／輕1】）は文

章家として知られる。王暉との關係は、王暉編纂の叢書『檀几叢書』に作品が掲載されている以外には見られない。

海内八大家のうち、曹爾堪(字は顧庵。浙江嘉善の人。一六一七—一六七九【言1/文1/品2/傷1】)、施閏章(字は尙白。安徽宣城の人。一六一八—一六八三【言1/規1/豪1/棲1/惑1】)、宋琬(字は玉叔。山東萊陽の人。一六一四—一六七三【言1/賞1/企1/棲1/假1】)は、みな王暉と交遊が見られる。また、同じく八大家の一人沈荃(字は繹堂。江蘇松江の人。一六二四—一六八四)や、曹爾堪の弟曹爾坊(字は子閑。【品1】)とも交遊がある。

諸九鼎(字は駿男。浙江杭州の人。【雅1/賞2/品1/企1/傷1】)は、弟の諸匡鼎(字は虎男。1636—?【言1/任1】)とともに詩文に巧みであり、王暉とも交遊がある。

このほか、著名人として王時敏(1)、陳維崧(1)、龔賢(3)、萬斯同(1)、萬斯大(2)、冒襄(1)、侯方域(1)、吳應箕(1)、夏允彝(1)、宋曹(1)、吳偉業(3)、陳洪綬(1)、姜實節(1)、木陳道忞(1)、劉城(1)、鄧漢儀(1)、朱彝尊(1)等が登場する。()は登場回数

b. 『今世説』中の王暉の友人・知人たち

『今世説』の登場人物のうち、王暉と何らかの交遊關係(詩文や書簡のやりとりがある等)を有する人物は王暉を除く395名中142名であり、全體の1/3以上に及ぶ。すでに紹介した人物以外に、登場回数は多くはないが王暉との關係が深い人物は以下の通りである。

徐階鳳(字は竹逸。江蘇宜興の人。【言1/雅1/豪1】)弟徐翹鳳(字は竹虛。【雅1】)とも交遊有り。

林雲銘（字は西仲。福建閩縣の人。一六二八—？【政1／文1】）
 方象瑛（字は渭仁。浙江遂安の人。一六三二—？【文1】）父方成郊（字は稚官。【德1／雅1】）も掲載されている。
 魏禧（字は冰叔。江西寧都の人。一六二四—一六八一【言2】）交遊の痕跡は見られないが、兄魏祥（字は善伯。一六二〇—一六七七【言1／棲1】）、弟魏禮（字は和公。一六二八—一六九三【言1／棲1】）も『今世説』に登場する。
 徐士俊（字は野君。浙江杭州の人。一六〇二—一六八一【文1／雅1／排1／惑1】）
 尤侗（字は展成。江蘇蘇州の人。一六一八—一七〇四【賞1】）
 周啟嵩（字は立五。江蘇宜興の人。【賞1】）
 吳儀一（字は舒鳧。浙江錢塘の人。一六四七—？【豪1】）
 莊同生（字は玉驄。江蘇武進の人。一六二七—一六七九【品1】）
 蔣鑰（字は馭鹿。江蘇常州の人。一六二五—？【寵1】）

このほか、交遊が見られる人物として、朱一是（3）、王崇簡（1）、曹溶（1）、汪楫（3）、吳興祚（1）、錢謙益（1）、紀映鐘（1）、黃宗羲（2）、朱鶴齡（1）、宋肇（2）、王弘撰（1）等がいる。（一）は登場回数¹⁹）
 なお、王暉は揚州の文人張潮と共編で多数の文人の著述を集めた『檀几叢書』を編纂しているが、その中に見られる著者108名のうち、王暉と何らかの關係が認められる人物は46名、その内『今世説』の登場人物は31名であり、かなりの割合を占めている。なお、文末附表の交遊の覽に『檀几叢書』中の作品の著者については太字ゴシック数字で示した。

さらに、共編者の張潮が編纂した小説集『虞初新志』²⁰についても、その掲載作品等に王暉の協力が見られる。『虞初

新志』約79名の著者のうち、半数以上となる39名が王暉の關係者で、しかもそのうち30名が『今世説』に登場する人物でもある。⁽²¹⁾ むろん、中には張潮との共通の友人もいると考えられ、さらに詳細な分析を要すが、本論ではその關係性を指適するにとどめ、これ以上言及しないこととする。⁽²²⁾

c. 王暉とその親族の記述について

前述の通り、『今世説』には王暉およびその親族に關する記述が散見する。その具體的な人物については以下の通り。

王暉【徳1／文1／雅1／賞3（張綱孫、諸九鼎、陸進）／品2（曹爾堪、趙鑰）／夙2（王鼎、王小能）／豪1（杜首昌）／企1／傷1（王小能）／任1／排1（妻鄒氏）／輕1（沈六如）／惑2（張元時、施閏章）】内譯として、（ ）のように誰かとともに登場する場合が13箇所と多く、王暉一人のみの登場は5箇所である。

王湛（字は澄之。一六〇六一一六七四【徳1／言1】）王暉の父。

鄒氏【排1】王暉の後妻。文學鄒公遴の女。

王鼎（字は用和）【夙1】王暉の四男。

王小能（一六七七一—一六八二【夙1／傷1】）王暉の五男。六歳で夭折。

王嗣槐（字は仲昭。浙江錢塘の人【品1／忿1】）王暉の甥（家兄とも）。

胡璽（字は保林。浙江仁和人【徳1／政1／方1／術1】）王暉の長男王箴（字は大受）の妻である胡氏の叔父。

陸進（字は蕞思。浙江仁和人【言1／賞1／品1】）王暉の先妻陸氏の兄。

おわりに

以上、王暉の編纂した『今世説』の特徴について考察した。『今世説』は数ある世説體作品の一つであり、その體裁もほぼ『世説新語』を模しており、その意味では單なる模倣作品の一つに過ぎないのかもしれない。しかし、王暉にとっては決して『世説新語』に模すために編纂を企圖したのではなく、同時代の人物たちのエピソードを集め掲載するための方便として『世説新語』の形式を利用したと考えるのが妥當であろう。『今世説』の編纂状況より當時の文人たちが、どのようにエピソードを集めたのか、またどのような人物のエピソードを集めたのか、その様子を窺うことが可能である。また、王暉を通じて、當時の文人たちの交遊ネットワークや、文人社會の實態を窺う一資料として、『今世説』は有用であると言えるのではないか。

ただし、紙數の都合もあり、『今世説』の記述が何に據つたものであるか等、その具體的な調査分析を行うには至らなかつた。この詳細を説明することが、王暉の、ひいては當時の文人たちの文人ネットワークの一端を説明する手がかりになるのではないかと考えているが、それは今後の課題とし本論はここまでとしたい。

附表『今世説』中の登場人物と王暉との關係について

3	2	1	No.
徐旭齡	孫奇逢	梁清標	氏名
1	3	2	登場
0	0	1	交遊
6	5	4	No.
嚴沆	魏兆鳳	胡璽	氏名
1	1	4	登場
5	0	5	交遊
9	8	7	No.
黃雲	方成鄉	黃與堅	氏名
2	2	1	登場
2	0	1	交遊
12	11	10	No.
周亮工	田作澤	陳素	氏名
17	1	1	登場
8	0	0	交遊
15	14	13	No.
毛奇齡	陳鵬	趙璧	氏名
8	1	1	登場
9	0	0	交遊

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	No.
陸圻	顧夢遊	姜鶴儕	毛應鎬	包名捷	王湛	沈泓	蕭孟昉	田茂遇妻	田茂遇	王範	毛之履	荆文端	嚴正矩	王翹	計東	氏名
23	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	1	2	10	登場
1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	交遊
47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	No.
包秉德	袁駿	呂律	朱一是	孫宏	王暉	沈蘭先	徐緘	姜廷梧	陳廷會	唐容齋	孫默	沈謙	李士模	李士楷	趙希乾	氏名
1	2	1	3	1	18	1	2	1	4	1	1	6	1	1	1	登場
0	2	0	3	0	0	2	5	0	6	0	4	12	0	0	0	交遊
63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	No.
王猷定	袁于令	徐芳	毛際可	衛貞元	張錫懌	徐嗜鳳	曹爾堪	王士祿	宋琬	汪琬	施閏章	魏象樞	王士禛	蔣超	閔世璋	氏名
3	1	1	3	1	2	3	5	7	5	9	5	1	9	2	1	登場
2	4	0	30	0	0	29	11	2	2	1	9	0	3	0	0	交遊
79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	No.
沈儒	徐敬直	陸進	許先甲	諸匡鼎	毛先舒	林璐	林嗣環	吳晉	宋祖謙	涂西	魏禮	魏禧	魏祥	申涵光	杜濬	氏名
1	1	3	4	2	15	1	3	1	2	1	2	2	2	4	3	登場
0	0	7	0	13	13	1	9	0	0	0	0	9	0	0	2	交遊
95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	No.
李因篤	曹溶	程康莊	王崇簡	董上治	李公渭	郭文雄	荆彥	周茂源	嵇宗孟	許三禮	顧豹文	林雲銘	姜希轍	史大成	龔鼎孳	氏名
2	1	1	1	1	1	1	1	2	3	1	2	2	1	1	2	登場
0	4	0	1	0	0	0	0	0	5	0	3	15	7	2	0	交遊

111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	No.
王時敏	宋實穎	楊雍建	沈自南	錢謙益	孫治	吳興祚	顧祖禹	徐繼恩	曹序	吳白朋	吳任臣	汪楫	宗元鼎	張新標	方象瑛	氏名
1	4	1	1	1	7	1	1	3	1	6	4	3	3	1	1	登場
0	9	2	0	0	6	4	0	3	0	1	4	1	3	0	30	交遊
127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	No.
高兆	黃宗會	黃宗羲	來集之	惲格	鄒祇謨	徐士俊	趙開心	李明睿	魏裔介	紀映鐘	錢肅潤	吳兆騫	陳玉璣	鐘淵映	葉舒崇	氏名
2	1	2	3	4	2	1	9	5	1	1	1	1	1	1	2	登場
4	0	3	1	6	5	26	0	0	0	4	15	0	6	0	0	交遊
143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	No.
徐汾	包飲和	徐增	錢芳標	朱溶	吳嘉紀	安致遠	陸繁弨	江思令	吳農祥	毛遠公	黃永	董以寧	賈開宗	陸延綸	宗元豫	氏名
1	1	1	1	2	2	4	5	1	3	2	1	1	1	1	1	登場
9	0	3	0	3	0	0	1	0	4	1	2	0	0	0	0	交遊
159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	No.
王與敕	高珩	汪懋麟	繆彤	孫枝蔚	顧有孝	徐白	翁遜	柴紹炳	陳允衡	徐一鴻	張綱孫	何元英	王庭	蔣永修	李清	氏名
1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	登場
0	1	4	2	0	9	0	0	3	0	0	26	2	4	2	0	交遊
175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	No.
邵燈	周文煒	李果	黃之翰	李夢蘭	葉闈	姜圖南	諸九鼎	吳懋謙	朱輅	吳晉刻	沈胤范	董俞	徐翻鳳	吳宗信	丁澎	氏名
1	1	1	1	1	2	1	6	2	1	1	2	2	1	1	3	登場
0	0	0	8	0	5	0	11	0	0	0	0	7	3	0	7	交遊

191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176	No.
朱鶴齡	周啟嵩	儲欣	許友	金鼎	張三異	唐夢賚	孫光祀	盧琦	李霽	吳國對	尤侗	林嶽隆	計名	趙而忭	吳綺	氏名
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	登場
1	12	0	0	0	0	1	0	0	0	0	17	0	0	0	2	交遊
207	206	205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	No.
周嬰	衛泳	嚴允肇	孫金礪	許旭	萬斯大	李鄴嗣	龔賢	張翀	錢棻	朱士稚	梁以楠	朱爾邁	蕭雲從	陳維松	徐鈞	氏名
1	1	1	2	1	2	3	3	1	1	1	1	1	1	2	2	登場
0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	交遊
223	222	221	220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	No.
莊回生	萬斯同	萬斯選	萬言	萬泰	曹爾坊	史廷柏	胡介	冒襄	侯元泓	宋德宏	吳之器	陳周政	鐘震陽	馬駿	張新杆	氏名
1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	2	1	1	1	1	1	登場
25	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	交遊
239	238	237	236	235	234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	No.
文點	顧景星	汪汝蕃	沈峻會	李式玉	丁溱	羅賢	高售	林之遇	林玉達	王嗣槐	李昌祚	徐世溥	黎士宏	趙鑰	黃虞稷	氏名
1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1	登場
1	0	0	0	4	8	1	0	0	0	14	0	0	0	1	0	交遊
255	254	253	252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	No.
宗學詩	趙甸	章穀	吳廌	虞黃昊	卓人阜	沈功宗	沈公趾	沈家恆	魏世效	胡貞開	陸埜	任辰旦	喬鉢	趙瀚	鄒甲芳	氏名
1	1	1	1	1	1	2	1	2	1	2	2	1	1	1	1	登場
0	0	0	0	3	4	0	0	2	0	9	1	0	0	0	0	交遊

271	270	269	268	267	266	265	264	263	262	261	260	259	258	257	256	No.
陳孝威	王昊	杜首昌	李淦	夏允彝	吳應箕	侯方域	殷嶽	楊思聖	曹國矩	李如穀	熊文學	汪泣謙	宋肇	王小能	王鼎	氏名
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	登場
0	0	6	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	1	交遊
287	286	285	284	283	282	281	280	279	278	277	276	275	274	273	272	No.
柏立本	丁克振	李文純	程邃	閔派魯	丁彥	周廷鑰	王澤宏	張王治	彭而述	茅兆儒	王舟瑤	楊方榮	謝晟	吳儀一	丁耀亢	氏名
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	登場
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	21	0	交遊
303	302	301	300	299	298	297	296	295	294	293	292	291	290	289	288	No.
汪鶴孫	張彥之	邱則飛	張壇	張竣	陸塔	沈士逸	王弘撰	盛於斯	李日景	胡玉昆	徐乾學	徐元文	介元燈	韋人鳳	魏學渠	氏名
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	登場
0	9	0	4	2	2	0	1	0	1	0	2	0	0	2	3	交遊
319	318	317	316	315	314	313	312	311	310	309	308	307	306	305	304	No.
申浦	羅孚尹	邱上儀	郭鼎京	王章	宋曹	李震生	宋景昭	計準	李盤	吳鏞	趙溧	沈炳	陳維嶽	繆永謀	王撰	氏名
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	登場
0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	7	3	0	0	0	2	交遊
335	334	333	332	331	330	329	328	327	326	325	324	323	322	321	320	No.
沈永令	蔡瑛	王崇節	吳偉業	顧樵	萬燾祺	范暎文	方其義	顧若璞	張夫人	丁季淵	吳氏	宗元贈母陳氏	杜濬母	汪灝	李孝貞	氏名
1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	登場
2	0	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	交遊

348	347	346	345	344	343	342	341	340	339	338	337	336	No.	
張道濬	柏古	徐介	梁以樟	姜實節	劉體仁	金式祖	蔣鐘	史鑿宗	陸子黃	張道岸	陳洪綬	藍瑛	氏名	
1	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	登場	
0	4	0	0	0	0	0	11	4	0	0	0	0	交遊	
361	360	359	358	357	356	355	354	353	352	351	350	349	No.	
張夫人	宋嗣京	彭孫遜	周永年	沈自繼	徐作肅	傅宗	來蕃	徐林鴻	王岱	陳世祥	謝良琦	沈子均	氏名	
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	登場	
0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	交遊	
374	373	372	371	370	369	368	367	366	365	364	363	362	No.	
周綸	沈六如	張振孫	張麒孫	周在浚	陳弘緒	木陳道忞	程可則	蔣玠	鄒氏	潘沐	李天馥	陳魯季	氏名	
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	登場	
1	0	6	0	1	0	0	0	0	0	0	6	0	交遊	
387	386	385	384	383	382	381	380	379	378	377	376	375	No.	
高佑鈺	朱彝尊	張萬斛	夏基	張櫟園	馮肇杞	鄧漢儀	黃周星	孫沂如	劉城	翁逢春	侯忭	諸嗣郢	氏名	
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	登場	
0	0	0	1	0	1	0	15	0	0	0	0	1	交遊	
					396	395	394	393	392	391	390	389	388	No.
					張元時	陸氏	查繼昌	洪景融	辛氏	李潛	王廷棟	邵彌	楊體元	氏名
					1	1	1	1	1	1	1	1	1	登場
					2	0	0	2	1	0	0	0	3	交遊

※人物は『今世説』（『叢書集成初編』2825・中華書局・一九八五年）に基づく（注の登場人物は除く）。

※順番は登場順。 ※名が不明の場合は原文通り字・號とした。

※「登場」の項は、『今世説』に登場する回数。ただし、注に登場する場合は除外した。

※「交遊」の数は、以下の王暉の作品集における関連作品・序文・評語等の有無によって判別した。ただし、王暉についてはカウントしていない。

『霞學堂全集定本』『蘭言集』『墻東志』『千秋雅調』『聽松圖題詞』『幽光集』『雜著十種』『檀几叢書』（全て國立公文書館内閣文庫所藏本による）

数字が**ゴシック太字**の者は『檀几叢書』中に作品が掲載されている人物、傍線の者は同様に『虞初新志』中に作品が掲載されている人物を示す。

注

- (1) 王暉の人となりや家族・各作品・交遊關係等に關する詳細については、拙論「王暉とその交遊關係について」（大東文化大學『漢學會誌』第五十六號・二〇一七年三月）、王暉と僧侶との交遊については「王暉の交遊關係中の僧侶について」（蓮花寺佛教研究所紀要』第九號・二〇一六年三月）、王暉と佛教との關わりについては「明清文學と『金剛經』——王暉「金剛經紀驗」とその周邊——」（蓮花寺佛教研究所紀要』第十二號・二〇一九年三月）を參照。
- (2) 張潮『尺牘友聲』新集卷五
- (3) 詳しくは、拙論「王暉『遂生集』について——曹翰故事を手がかりに」（蓮花寺佛教研究所紀要』第十號・二〇一七年三月）參照。
- (4) 北京大學圖書館藏。未見。
- (5) 『四庫全書存目叢書』子部二四五冊（齊魯書社・一九九七年）
- (6) 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』（關西大學東西學術研究所研究叢刊』1・關西大學東西學術研究所・一九六七年）二五六頁B、七一八頁C參照。
- (7) 長澤規矩也編『和刻本漢籍隨筆集』第十三卷（汲古書院・一九七四年）の解説には、『粵雅堂叢書』を底本とするとしているが、『粵雅堂叢書』の刊行は、道光三十（一八五〇）年以降のため、別本の底本（『粵雅堂叢書』本『今世說』の底本か）ではないかと思われるが、詳細は不明である。

- (8) 國立公文書館內閣文庫藏・小塚私藏。このほか、前掲『和刻本漢籍隨筆集』第十三卷にも収録されている。
- (9) 劉強『世說新語』研究史論（復旦大學出版社・二〇一九年）
- (10) 蔡麗玲「世說體」の著作から見た晚明文學の一側面（『關西大學中國文學會紀要』二十七號・二〇〇六年三月）
- (11) 後述汪琬の「說鈴」とは別物である。
- (12) 『魯迅全集』九卷（人民文學出版社・一九八一年）66頁、67頁「至於『世說』一流、仿者尤衆、劉孝標有《續世說》十卷、見《唐志》、然據《隋志》、則殆即所注臨川書。唐有王方慶《續世說新書》（見《新唐志》雜家、今佚）宋有王謙《唐語林》、孔平仲《續世說》、明有何良俊《何氏語林》、李紹文《明世說新語》、焦竑《類林》及《玉堂叢話》、張塘《廿一史識餘》、鄭仲夔《清言》等、然纂舊聞則別無類異、述時事則傷於矯揉、而世人猶復爲之不已、至於清、又有梁維樞作《玉劍尊聞》、吳肅公作《明語林》、章撫功作《漢世說》、李清作《女世說》、顏從喬《僧世說》、王暉作《今世說》、汪琬作《說鈴》而惠棟爲之補注、今亦尙有易宗夔作《新世說》也」
- (13) 「然纂舊聞則別無類異、述時事則傷於矯揉」
- (14) 前掲『魯迅全集』九卷、310頁、311頁「至于『世說』、後來模倣的更多、從劉孝標的《續世說》——見《唐志》——一直到清之王暉所做的《今世說》、現在易宗夔所做的《新世說》等、都是倣《世說》的書。但是晉朝和現代社會底情狀、完全不同、至今日還模倣那時底小說、是很可笑的。因爲我們知道從漢末至六朝爲篡奪時代、四海騷然、人多抱歷世主義。加以佛道二教盛行一時、皆講超脫現世、晉人先受其影響、于是有一派人去修仙、想飛昇、所以喜服藥。有一派人欲永游醉鄉、不問世事、所以好飲酒。：而生在現代底人、生活情形完全不同了、却要去做那時社會背景所產生的小說、豈非笑話？」
- (15) 前掲『世說新語』研究史論 112頁、116頁
- (16) 慶應義塾大學附屬圖書館藏本、『筆記小説大觀』（臺北新興書局）四十二編第一冊等。
- (17) 「德行」「文學」を上・中・下、「言語」「言志」「方正」「賞譽」を上・下に分ける。
- (18) 前掲「世說體」の著作から見た晚明文學の一側面 181頁、182頁、「表一 晚明（世說體）著作年表」参照。
- (19) その他、王暉の友人である張潮（一六五〇—一七〇九？）に『禪世說』および『仙世說』の編纂計畫があり、『禪世說』については内容等について検討もされていたが、刊行には至らなかった。詳しくは、拙論「明清文人と佛教」（蓮花寺佛教研究所紀要）第七號・二〇一四年三月）253頁、252頁参照。
- (20) 『四庫全書總目提要』卷一四三・子部小説家類・存目一「蓋標榜聲氣之書、猶明代詩社餘習也。至於載人已事、尤乖體例」

- (21) 前掲『世說新語』研究史論』282頁「觀其書思想旨趣，乃充斥忠孝節義，文章道德之類說教，與《世說》簡約玄遠之情調相去甚遠。其書所敘之事，雖廣收博輯，亦不免無稽不考之談」
- (22) 陳大康「王暉與他的《今世說》」（『明清小說研究』一九九四年第一期）「魯迅先生論及《世說新語》之後的各種倣效之作時，曾用『然纂舊聞則別無類異，述時事則傷於矯揉』兩語概括了它們的痛病，這批評對於《今世說》也完全適用。不過，《今世說》畢竟是清初較有影響且較有代表性的著作，它在今日又有助於我們了解當時文壇的狀況，士人的風貌及其活動，其中雖多有矯揉之處，但士林衆人的心態也可由此窺見。而且，在『世說』體小說的發展過程中，這部作品也自有其特色與地位」
- (23) 「自經史而外，著述之家，不知幾千萬計。而其書或傳或不傳，即幸而傳矣，人或有見有不見。獨世說新語一書，纂于南宋，多撫晉事，而兼及于漢・魏。垂千百年，學士大夫家，無不翫而習之者。雖臨川王之綜敘，清遠自高，亦以生當其時，崇尚清流，詞旨故可觀也。至於今，讀其書，味其片語，猶能令人穆然深思，惟恨不得身親其際，與爲酬酢。假得王・謝・桓・劉・羣集一堂，耳提面命，其心神之怡曠，抑何如耶」
- (24) 「今朝廷右文，名賢輩出，閎閱才華，遠勝江左，其嘉言懿行，史不勝載。特未有如臨川衷聚而表著之，天下後世，亦誰知此日風流更有度越前人者乎。豫不敏，志此有年，上自廊廟縉紳，下及山澤隱逸，凡一言一行，有可採錄，率獵收而類紀之。藁凡數易，歷久乃成」
- (25) 『世說新語』巧藝に「顧長康畫裴叔則，頰上益三毛」とある。繪畫の本質をのべる。また、同じく『世說新語』巧藝に、顧愷之の言葉として「傳神寫照，正在阿堵中」とある。本來の阿堵は目玉のことであるが、王暉の自序では自身が制作した『今世說』のことを指すのである。
- (26) 「或疑名賢生平大節固多，豈獨籍此一端而傳。不知就此一端，乃如頰上之毫，睛中之點，傳神正在阿堵。豫度後之人得觀是編，或亦如今之讀臨川書者，心曠神怡，未可知也。雖然，臨川取漢末・魏・晉數百年之事，網羅編次，遂勒成一家言。而豫欲以數十年中所見所聞，與之頡頏。世有覽者，毋亦笑豫之心勞而日拙也夫。
- 康熙癸亥仲春，武林王暉題于牆東草堂」
- (27) ①「一是集名賢，斷自本朝爲準。開有文筆事業，顯于勝國，而卒于本朝者，要不可不謂今之人也，亦爲採入」
- (28) ②「一世說例多異稱，鈍資難于記憶。是集名賢，或字或號，止載其最著者，雖至數見，俱各從同，以便披覽」
- (29) ③「一是集條目，俱遵世說原編。惟自新・黜免・儉嗇・讒險・紕漏・仇隙諸事，不敢漫列。引長蓋短，理所固然。乃若補爲全目，以成完書，願俟後之君子」

- (30) ④「一是集所列條目、祇據刻本、就事論事、如此事可入德行、則入德行。可入文學、餘皆倣此。乃有拘儒、欲指一事、概以生平、至罪豫論不當者、請勿讀是書」
- (31) ⑤「一是集事實、俱從刻本中、擇其言尤雅者、然後收錄。若未見刻本、雖有見聞、不敢妄列。昭其信也」
- (32) ⑥「一孝標之注世說、博引旁綜、所采書目、幾至一二百種。近日無書可考、時賢屢歷、徵據尤難。是集注內所載爵里、以至生平大略、俱不敢憚煩、廣爲蒐輯。若偏覓不得、寧使闕如、以俟後補」
- (33) ⑦「一昭代右文、名賢輩出、嘉言懿行、固不勝收、而是書止據所見諸集輯成、覽者無罪其不廣也。凡我遠近諸名家、倘以全集見貽、自當細搜續輯、彙訂今世說補一書。務期蚤寄郵筒、庶免遺漏之慮」
- (34) ⑧「一物力艱難、剗削之資、全賴好事、倘有高賢傾囊解囊、則闡幽表微、爲德不淺」
- (35) ⑨「一汪鈍翁太史說鈴一書、詞旨雋永、妙竝臨川。偶從吳江得見刻本、停舟借錄、約數十條、意在宏暢宗風、遂忘掠美之嫌」
- (36) ⑩「一陸子麗京、向著西陵新語、因暮年寄跡方外、未有全書。令嗣冠周、手授稿本、是集採拾頗多、要非無據」
- (37) ⑪「一汪太史舟次、林使君西仲、毛大令會侯、朱處士若始、一見是書、遂相欣賞。品題之下、閒有權衡、要歸至當、受益良多」
- (38) ⑫「一丁儀部葑園、孫子祖望、毛子稚黃、陸子蕙思、諸子虎男、各出案頭新書、慨然借錄。淘金入冶、集翠成裘、良友佐理之功、自不可泯」
- (39) ⑬「一方太史、貽書相告、期以史局事竣、或得乞假歸來、佐成快學。今急欲出書、請政當世、不能久待、殊爲歉然。然來書有云、事取其核、義取其公、辭取其馴雅。三復佳言、故當不負良友」
- (40) ⑭「一是書原與同人互相參訂、集中所載先君實行二條、皆同人從志傳採入、一從本文、非昧敢附於臨文不諱之義也。至皞平生、本無足錄、向承四方諸先生贈言、頗多獎借、同人即爲節取一二、強列集中、實增愧慙」
- (41) 『今世說』では「夙惠」とする
- (42) 原文は注29（通し番號③）を参照。
- (43) 『今世說』（叢書集成初編）2825・中華書局・一九八五年）による。
- (44) 楊勇校箋『世說新語校箋』修訂本（中華書局・二〇〇六年）、『世說新語』上・中・下（『新釋漢文大系』76、77、78・明治書院・一九七五年）による。
- (45) 便宜的に通し番號を振った。
- (46) なお、19田茂遇の妻の話には、注が附されていない。

- (47) 『今世説』各篇の篇名の一字目で省略して記す。算用数字は登場数。以下同じ。
- (48) 『清史稿』卷四八四、文苑傳一「莊廷鑑史禍作、圻坐逮。以先嘗具狀自陳、事得白、歎曰、今幸得不死、奈何不以餘年學道耶。親歿、遂棄家遠遊、不知所終」
- (49) 『檀几叢書』の編集状況および王暉との関係については、拙論「張潮の書簡に見られる『檀几叢書』の編集状況について」(『漢學會誌』第五十五號・二〇一六年三月) 119頁参照。
- (50) 『虞初新志』の編集状況については、拙論「張潮の書簡に見られる『虞初新志』の編集状況について」(『漢學會誌』第五十四號・二〇一五年三月) 参照。
- (51) 拙論「『虞初新志』について」(『東洋研究』第二一九號・二〇二二年一月) 34頁参照。
- (52) この他、張潮編纂の『昭代叢書』編纂にも王暉は關與していると見られる(拙論「張潮の書簡に見られる『昭代叢書』の編集状況について」(『漢學會誌』第五十八號・二〇一九年三月) 参照)。